

豊かさの意味を求めて

人が好き まちが好き
街かど
Report
レポート



リポーター

地域おこし協力隊(福住担当)
 岸田 万穂さん

間伐後、光と風が心地よく通り抜ける森

ヨウのヨウ

東京の大学に通っていた頃、若者がいなくなり手入れが行き届かなくなった地方の里山に、都会で燻っている学生を連れて間伐に行くツアーの企画運営をするサークルの代表を任せていました。私たちの世代は、就職活動で100社以上落ちて、それをきっかけに心を病んでしまったり、大都会東京のもの凄いくらいスピードで沢山の物が捨てられていく社会に疲弊したり、息苦しさを感じている若者は少なくありません。普段頭ばかり使っていた私たちは、労働によって身体感覚が取り戻されていく心地よさや、山に生きる木や動物の命と身体一つで向き合い研ぎ澄まされていく感覚が本心に貴重で、初日は暗く鬱々としていた森が、最終日には風と光が心地よく通る森に生まれ変わる時、言葉では言い表せない感動を覚えたのでした。

一方で、地域で山と共に暮らしてきた人々の知恵や生きる力の逞しさに触れて自分がかたに無力さを感じることも多くありました。そんな経験から、山という空間や、山間地域の生活文化というものへの興味関心は募っていきました。

なぜ、木工なのか



山岳地帯の遊牧民

山間地域の生活文化をもっと知りたくて、国内はもちろん、東南アジアやインド、アフリカの農山村地域を中心に旅をしていた時期がありました。電気やガス、水道などが通っていない奥地でも、とても豊かに暮らしている事実は私の価値観を大きく変えました。3・11を経験した直後だったこともあり、お金があっても消費することでしか生きていけない自分が情けなく、恐ろしかった。その頃から、何か手に職を付けたい、という考えが強くなっていったように思います。

いろんな国と地域の暮らしを観察すると、どこにでも必ずある欠かせない道具に気がきました。それは、刃物と楽器です。この二つの道具が人々の生活の側に必ずあり、人にけ継いでいく、そんなものづくりをしたい、と私は思います。

古家具の仕立て直しをしたり、地域材や間伐材を使った木工作品を作ったり、竹林整備をしてバンブーグリーンハウスを作ったり、私が木工という手段を使って取り組んでいる事の根源にあるのは「今目の前にある宝物を生かし、伝えられるようにしたい」という想いです。地元の人には「価値が無い」と思っている物でも、外から来た私にとってはとても価値があり、そこに「手間」をかけても経済活動として成り立つ仕組みを作る事ができれば、その価値を多くの人に伝え、いろんな形で地域に還元できるはずだと考えています。

木工という技術を使って暮らしを少しでも作れる人間になりたい、と考えながら岐阜県で木工を学んできました。技術や知識は学ばば学ばほど楽しい一方で、森林の抱える問題や、日本では物がこれだけ溢れて廃棄されているのに、作り続けていいのだろうか、という視点も無視できませんでした。「物を作る」を目的にしたものづくりは一部を除き、時代に求められていない気がします。これからは物を作ることが森林を育てる事になり、使える物は捨てずに今の生活に合わせて仕立て直し、受

民家の取り壊しや改修で出る古材や古家具、瓦やタイルといったものや、地域の森林・竹林整備で出てくる地域資材、それを元に作った飼料や肥料を売る、オール篠山産の生活資材センターみたいな物が作りたい、というのが私の大きな目標です。かつては当たり前であった地域の物を活かし、物を大切に作る暮らしをつなぎ直せるような取り組みを地域の方々と一緒に達成してみたい。今は未熟なところも多々ありますが、地域の方々の懐を借りて、今年も目標に向かって活動して行きます。



机に生まれ変わったたんす



民家の解体現場からレスキューしてきた古家具たち



地域材を使ったオール篠山産のいす



福住地区で建設中のバンブーグリーンハウス（竹を使った温室）